

静脈産業の

現在地と未来



(4)

資源循環ネットワーク
彌永^{やなぎ} 冴子^{さえこ}

されている。無論、夢洲循環型社会実現に向けただけではない。日本国内には、草花が咲き誇る自然豊かな公園や、生物多様性に富んだビオトープへと姿を変えた魅力的な最終処分場跡地などが複数存在する。

2023年も終わりを迎ようとしている。まだ来ぬ2024年の先の話は性急だが、2025年の到来が待ち遠しい。大阪万博の開催、3年に一度の瀬戸内国際芸術祭の開催、そしてそれに間に合わせるように建設が進む、安藤忠雄氏設計の直島新美術館(仮称)のオープンと、2025年は関西・四国地域でのビッグイベントが続くからである。大阪万博開催地である夢洲は、IRRの誘致先としても大きな話題を呼んだ。開業に向け

準備は進んでいる模様で、2030年頃には日人間が跡地利用をどうしようかと考えを巡らせて

役割は、生活環境の保全上支障の生じない方法で、廃棄物を適切に貯留かつ生物的、物理的、科学的に安定な状態にすることにあり、われわれの生活になくはならない社会インフラである。さらに、処分完了後に役割を終えた跡地利用は、管轄する行政や民間企業の範疇という意識が強く、資源循環の文脈とは切り

資源循環型社会における最終処分場の役割

大阪万博会場「夢洲」の跡地利用から考える

賑わっていることだろう。

いる間に、埋め立てられた土地やその途中にできたり湿地には、昆虫が住み着き、鳥が集い、豊かな生態系が育まれてきた。

種りサイクル法の整備に付加価値をつけた跡地利用についても検討していかねばならない。

夢洲は、大阪の家庭ごみ焼却灰や産業廃棄物建設残土などの埋め立てで作られた人工島である。その跡地利用計画が長年宙に浮いた経緯などから、一時期「負の遺産

大阪の家庭ごみ焼却灰や産業廃棄物建設残土などの埋め立てで作られた人工島である。その跡地利用計画が長年宙に浮いた経緯などから、一時期「負の遺産

たと言え、稀少種が確認され、生物多様性ホットスポット△ランクに選定

高度資源循環のループを高度資源循環サイクルにおける最下流の重要プロセスを検討すること

から、一時期「負の遺産

高度資源循環のループを高度資源循環サイクルにおける最下流の重要プロセスを検討すること

高度資源循環のループを高度資源循環サイクルにおける最下流の重要プロセスを検討すること

高度資源循環のループを高度資源循環サイクルにおける最下流の重要プロセスを検討すること



大阪万博予定地の「夢洲」

ではないか。

例えば生物多様性を育むビオトープとするのがよいのか、エコタウン事業等への活用を考えるのが良いのか、IRR等商業施設等の建設を押し進めるのか。こうした検討の際には、行政機関等との連携を前提としつつ、静脈産業側が抱く高度な「価値観」を起点とした議論が必要になる。

高度資源循環のループを高度資源循環サイクルにおける最下流の重要プロセスを検討すること